

サラム・サラム(23)
著作集を刊行中の作家
鄭承博さん



昨年一二月一一日、淡路の洲本に鄭承博さんを訪ねた。メンバーは、父親が鄭さんと文学の仲間であったという宝塚の教師・大黒澄枝さん、社会新報の今田裕子さん、それに堀内穂さん、金英達さんと私の五名。須磨からフエリーに乗り淡路島に上陸。すでに運転をしなくていいことになつている私は、ビールを飲み始める。これまでむくげとして、みな名前は知つていたが、交流の機会がなかつたのである。わたしも、季刊三千里のバーでお目にかかつっていたが、親しくお話しすることはなかつた。

神戸学生青年センターの朝鮮史セミナーで鄭さんをお招きしたのが、昨年五月。「私の『在日60年』」のテーマで、話していただいた。セミナーのうち、いつものように講師を囲んでの飲み会があり、その晩は珍しく学生センターの宿泊がいっぱい取れず、ホテルのある三宮でまた二次会と

翌日、かねてから鄭さんといつしょに訪ねよう約束していた神戸市兵庫区の鳥原貯水池に出かけた。淡路からセミナーに来られていた鄭さんの

著作集第三巻『ある日の海峡』に文章を寄せている『文芸淡路』同人の北原洋一郎さんもいっしょだ。鳥原貯水池は戦後、鄭さんが働いていたことがあるところだ。現在刊行中の著作集の第一回配本は、『私の出会った人々』(第四巻)だが、今回著作集刊行の契機ともなつた、三重の島津威雄さん作成の同名のパンフレットを読んでもらう。鳥原貯水池のことが書かれてあつた。「贅沢なお鉢」という題のエッセイで、戦後一九六〇年頃にそこで一緒に働いていた友人と洲本で久しぶりに会つたときの話である。その鳥原貯水池は、子供の頃には私の「庭」だったところだ。兵庫区都由乃町に石井幼稚園というのがあり、母がそこで働いていた関係でその幼稚園の隣に住んでいたのだ。家から一〇分も山に登つて行くと貯水池があり、そのあたりの崖に、近所のガキどもと(もちろん、わたしもそのガキだったが)洞窟をほり、しおつちゅう遊んでいたのである。貯水池の広場には石とセメントで作つた龜があり、その奥の広場(第二広場と呼んでいた)には、竹がたくさん生えており、採つてきては水鉄砲や紙鉄砲を作つていた。

私も神戸の朝鮮人の歴史を掘り起すことに関心をもつていたが、その関連でずっと鳥原貯水池のことが気になつていていたのである。ひとつは、貯水池と私の家の間の河原に豚小屋があり、そこで暮していた朝鮮人のことである。貯水池の工事そのものは明治の始め頃のもので、おそらく朝鮮人労働者が関与する会の地道な活動は全国的にも知られており、採つてきては水鉄砲や紙鉄砲を作つていた。

札幌郷土を掘る会の活動は全國的にも知られているが、その活動の中に藻岩山ダムの朝鮮人労働者に関する調査活動があり、すでに本も出版されている。札幌市民の飲み水と朝鮮人労働者をテーマにして演劇をつくり、自ら上演して広くアピールする活動も行なっている。なかなかそこまでできないが、自らの「飲み水」のルーツをさぐる形で朝鮮人の歴史を解していくというのはすばらしい方法だと思う。ぜひ私もこの方法に学んで、「神戸市民の飲み水と朝鮮人」をテーマに調査がしたいと考えているのである。

今回、鄭さんを三〇数年ぶり鳥原貯水池にお連れすると、鄭さんは非常に喜んでくれた。それに

(16) むくげ通信 142号

おもわぬ収穫もあつた。

私の子供のころの鳥原貯水池の水は、飲料水にも利用されており、大きな浄水場がすぐ横についていた。その後、鈴蘭台などおおきな町が上流にできて一時は悪臭ただよう川となり、とても飲料水などではなかつた。でも最近は貯水池の周りにハイキングコースなども作られ、それなりに水もたたえて大きな噴水も設置されている。鄭さんに戦後この貯水池でどんな仕事をされていたのか訪ねると、淀川の水を鳥原貯水池に引くための隧道工事をしており、そこでダイナマイトを仕掛ける仕事をされていたというのである。その隧道は、さくらに神戸の西部に供給するために西の方に伸びているという。鳥原貯水池はその工事の後は、淀川の水を一端ここに溜め、それを飲み水として供給しているではないかというのが鄭さんの考え方である。そういえば貯水池の上流からは汚い水は別の放水路で貯水池を通らずに流されるようになつていて。

私はだんだんと「神戸市民の飲み水と朝鮮人」をまとめるファイトが湧いてきたのである。まだなんの研究もしていないが、吹聴することで新しい情報が集まるかもしれないし、この研究につぶやつけることにもなるので仮説を述べたいと思う。先の千刈貯水池からの水は、朝鮮人の関係する隧道工事によって神戸にもたらされ、淀川の水は、大阪から六甲山系南面に隧道を掘り、西宮の北山浄水場、神戸市灘区の神戸高校の裏あたり、そして中央区の奥平野浄水場を通り鳥原貯水池に達している。さらにこの隧道は、垂水区、西区まで達している。

奥平野浄水場は、私が鳥原貯水池の近くから小

学校五年頃に引っ越したところの近くであり、神戸高校の裏は、結婚後四年間ほど住んでいたところである。神戸高校の裏には、戦争中日本軍が朝

鮮人を使つて壕を掘つていたといふ話があり、そこ

に長く住む人を紹介してくれた県議員の吉田俊弘さんと訪ねたことがある。その壕の話はよくわからず、朝鮮人が働いたといふのは戦後の治山事業ではないかということだつたが、その近くに隧道が走つており、その臭いが塩素臭いといふので蓋をしたことがあつたとのことだ。淀川の水にたっぷり消毒用の塩素を放り込んだらさぞ臭いもきつかつただろうと想像したが、その隧道が今

回問題としている隧道と同じものではないかと考えている。戦後の隧道工事と朝鮮人の関係は薄いかも知れないが、すくなくとも鄭承博さんは関係しているのである。千刈からの隧道は北山貯水池あたりでこの戦後の隧道と連結していることになるのではないかと思うが、地図を広げての検討もいまのところ全くしてない。したがつてこの仮説はずいぶん見当違いかもしれない。

さらに、「水道筋」のことが気になつてくる。神戸の水道筋は、いまも商店街として有名で、学生センターからも歩いて一五分ぐらゐのところにある。水道筋は文字どおり水道管がその下を走っている通りで、少なくとも芦屋市あたりまで通じており、その水道管は現在も使われているはずである。山手を走る戦後に引かれた淀川からの隧道と、かなり昔に引かれた水道筋にひかれた水道管には、どんな風に水が流れているのだろうか。淀川から奥平野浄水場まできたのが、水道筋を通つて神戸市の東灘区あたりまで流れているのだろうか。昔の水道筋工事には、朝鮮人労働者が関わつていただきたいたい。

た可能性は大いにあるのではないだろうか。

この「サラム・サラム」のコーナーでは、その人を紹介するのがメインなのに、長々と仮説を述べてしまつた。淡路の鄭承博さん宅訪問は、まさにこのコーナーの取材のためのもので、鄭さんが芥川候補にあがつて、洲本でマスコミに追いかけられておうじようした話などうかがつた。しかし、実は、私は、評判通りの鄭さんの料理に喜んで、昼からビールを沢山のみ早々と寝てしまつたため肝心の話は聞いていないのである。夕方に起き上がりつて、みんなと洲本にくりだし、はしごをして二軒目にかつて鄭さんがダンディーなマスターとして有名だったバー、現在は娘さんがされているスナックまで行つてフェリーの時間まで飲んだという次第である。

そういう訳で、このコーナーを終えるが、鄭さんの作品は味があつて飽きない。鄭さんは自伝的小説といわれる『裸の捕虜』の雰囲気がそのままの方だし、『私の出会いた人々』に見られる鄭さん好奇心はいまも健在である。鄭さんの全集は、私の古くからの友人である新幹社の高二三さんが、精一杯の思い入れを込めて作つた全集である。全集が無事完結するためにも、新幹社がつぶれない(高さん「ゴメン!」)ためにも、是非とも買って読んでいただきたい。

(飛田 雄二)



裸の捕虜
ある日の海釣

小説家として活動された
飛田雄二